

青森県立高等学校将来構想検討会議（第8回）概要

日時：平成28年1月25日（月）

15：00～17：00

場所：ウェディングプラザアラスカ ダイヤモンド

<出席者>

検討会議委員

香取 薫 議長、瀧本 壽史 副議長、伊藤 直樹 委員、小山内 世喜子 委員、
落合 喜一 委員、小磯 重隆 委員、古山 哲司 委員、佐井 憲男 委員、
斎藤 靖彦 委員、鈴木 雅博 委員、住吉 治彦 委員、高橋 公也 委員、
高橋 福太郎 委員、瀧原 祥夫 委員、月永 良彦 委員、斗沢 一雄 委員、
外崎 浩司 委員、成田 幸男 委員、長谷川 光治 委員、三上 順一 委員、
南谷 毅 委員、吉田 晃 委員

1 開会

中村教育長から、挨拶があった。

2 審議 「答申（案）について」

事務局から、資料1「青森県立高等学校将来構想について（答申）（案）」及び資料2「答申（案）における前回検討会議からの修正点」により説明があった。

委員からは、修正に関する意見はなかった。

議長から「只今御承認いただいた答申（案）については、『案』を取った上で、この後、県教育長に提出することとしたい。」との発言があった。

事務局から、資料3「答申（案）の概要」により説明があった。

委員から、次のような意見があった。

- 〈背景〉にある中学校卒業予定者数のグラフは生徒数減少の人数だけではなく、その減少が何学級に相当するのかを示した方が、概要版としてインパクトが出ると思う。また、〈これからの時代に求められる力〉にある「本県が重視する力」のフォントを全体に合わせた方が統一感が出ると思う。意図して変えているのであればその趣旨を教えていただきたい。

→（事務局）意図したものではないのでそのように統一する。

また、中学校卒業予定者数のグラフは附属資料の42ページにあるように県全体の中学校卒業予定者数の推移等を表している。次ページからは地区ごとのグラフになるが、生徒数の減少に応じた学級数は、地区ごとに状況が異なるた

め、幅を持たせた状態で記載している。したがって、県合計では、幅を持たせた状態での学級数の合計となるため、記載することが難しいという状況である。

- 答申の概要としては、これでもまだ難しいと思う。子どもたちにも分かるように作成してほしいという意味で前回発言した。これは委員の発言を圧縮したものだと思うが、詰め込みすぎという感じもするので、概要版の概要があっても良いのではないかという気もする。
- 答申の内容について、県民に誤った情報を伝えてはいけないということでこのような概要になったと思う。検討会議が立ち上がる際も、具体的な統合等について検討されると誤解している方もいたことから、決してそうではないということを説明しなければならなかった。したがって誤解がないように努め、ポイントをとらえたものがこのような形になったのだと思う。正確に作成されているが、確かに子どもたちにとっては理解しづらい内容だと思う。
- 今後は県教育委員会が県民に説明することになると思う。この概要で全ての情報が伝わるということは楽観的だと思うので、この概要を全面的に差し替えてほしいということではなく、プレゼンテーションの工夫をしてもらいたいということである。
- (事務局) 答申を受けた後には、県内6地区で地区懇談会を開催する予定であるが、県民の皆様に対しては、答申本体、概要版と合わせてスライド等も活用しながら、状況に応じて分かりやすく説明していきたい。
- 分かりやすく説明する努力を重ねてもらいたい。
- この概要のインパクトのある部分は、〈これからの時代に求められる力〉の部分である。読む人にも本県がこれから生徒に育てていくべき力が伝わると思う。ここは全体の中でも強調したい部分であるので工夫してほしい。
- 「第1」から「第5」まではすべて関係しているものである。全体を説明してもなかなか分からないので、説明する対象や時間帯等に応じて、説明の切り口を工夫してもらいたい。

議長から「概要版だけで理解してほしいということは考えていないと思う。これから各地区で県民の皆様の説明と思うが、その際には、十分丁寧な説明を心がけてほしい。なお、概要版についての対応は事務局一任としてよろしいか。」と発言があった。

委員からは異論がなかった。

議長から検討会議での審議を終えるに当たって、各委員に所感を求めた。

委員から、次のような発言があった。

- 県立高等学校将来構想の検討は、県内の中学校長の間でも話題になっている。多様なニーズに応えるため、生徒が持つ能力の伸長に考慮して、県を支える人材の育成を目指し、将来構想の検討を進めてほしいという意見が多い。そのことはこの答申に概ね示されたと思う。

現在、中学校の進路指導をしていく上で、中学生や保護者は、全般的に高校を選択するための要素として、就職や進学の実績を大切にしている。また、通学の利便性は全日制課程、定時制課程に関わらず、高校生活を送る上で大きな要素となっているので、改めてよろしくお願ひしたい。

- 一番驚いたことは、20年後に中学校卒業生数が半分になるということである。10年後には3,100人減少するということだが、10年はあつという間なので、長期的な視点で取り組んでいく必要があると感じている。自分の子どもが高校生だった頃と比べても、高校生を取り巻く状況も変わってきていると感じた。

商業高校や総合学科の高校など9校の学校を視察し、これまで職業教育にあまり関わったことがなかったが、専門科目を指導する学校の重要性は高いと感じた。このように知らない方も多と思うので、これからも説明することが重要だと思う。

オール青森の視点が大切なので、市町村や産業界の関係者などの教育関係者以外の方々の理解が非常に大切になってくると思う。

- 最初は検討内容を聞いているだけであったが、熱心な議論に、次第に責任ある会議に携わっているという実感が湧いてきた。職業教育を主とする専門学科を抱える学校は、数多くあるわけではないので、それらの学校は技術取得や資格取得等を通して社会人として巣立つ力を育てる責任があると思う。したがって、指導する教員はさらにスキルアップが必要であり、キャリア教育についても十分に研究しなければ、生徒たちに迷惑をかけることになるので気を引き締めている。生徒数が減ることは残念であるが、今後増えることを期待して生徒に接していきたい。

- 第2分科会の委員の方々と議論し、学校規模・配置の方向性が答申の中でもきちんと示せたと考えている。各地区部会の意見を生かしたことも良かったのではないかと。将来構想検討会議は、少子化、人口減少が背景にある。

自分はキャリア教育にも携わっているが、高校を卒業して県内の大学に進学しても良いし、県外の大学に進学しても良いと思う。県内に残るということは県内で頑張るということ。県外に出ても良いが、学んでUターンしてくるということもあるだろう。また、県外で働き経験を積んで、できれば家族も伴って

Uターンしてくるということもあるだろう。あるいは、Uターンしないのだが、どこかで青森県のことを思っているということもあるだろう。このように、これからは青森県のことを思い、青森県の将来を担う若者を育てるキャリア教育が必要だと思う。

- 地区部会の委員が様々な立場で素直に意見を述べてくれたことが印象的である。本日答申されることが感慨深い。NPOや経済界など様々な立場の方からの視点や意見を具体的に聞くことができ、大変勉強になった。
- 良い結論が出たと思っている。県の施策もそうだが、ここで議論された将来構想の内容が意外と現場の教員に届いていないという気がする。答申には、青森県は今、どのような子どもたちを育てたいのかが盛り込まれているので、是非、教員に読ませる機会を作ってもらいたい。また、教員を目指す若者を教えている大学関係者にはこのような答申を是非教材として取り上げてもらえればありがたい。
- 世の中の動きが早くて、ついていくのが大変な状況である。それを見据えて、答申にあるように学校だけではなく家庭や地域などオール青森の視点で子どもを育てていけば良いと思う。農業高校で学んだら、即農業に従事すれば良いというわけではなく、農業を学んでいなくても様々な経験を積んでから農業に従事するというのも、農業を底上げすることにつながると思う。そういう意味では郷土を大切に作る人財が育ってくれば良いと思う。
- 様々な分野の委員の本県教育に対する情熱や子どもたちの将来に対する熱い思いを感じることができた。今後も気を引き締めて学校経営に当たりたいと強く自覚している。
- 特に学校規模の標準に関しては、各PTAからもいろいろな御意見をもらっている。自分は各PTAの集まりがあるたびにこのことについて御説明し、皆さんに納得していただいている。これからの青森県をどうするかというビジョンを大切にしてほしい。ビジョンというのは変わることはなく、これに向けて青森県をどうしていくのかということが大事である。人口が減っていると言うが、気候が変わってきているので、住みやすくなるのは、20年後、30年後の青森県であり、逆に他県から移住してくるかもしれないと考えている。人口減という悲観的な発想だけではなく、青森の魅力を発信し、青森県民がそれを言えるように子どもを育むとともに、楽観的未来志向の発想を持つことが大切だと思う。

この2年間で子どもたちのためになる、素晴らしいことができたと感じている。

- 今、青森県で重要なのは、かつてイギリスの元首相であるトニーブレアが言った「Ask me my three main priorities for Government, and I tell you: education, education and education. (私に三つの最優先政策を挙げよと言うなら、一に教育、二に教育、そして三、四がなくて五に教育だ。)」ということである。そして、今、国民が心すべきことは、ジョン・F・ケネディが言った「Ask not what your country can do for you; ask what you can do for your country. (国があなたのために何をしてしてくれるのかを問うのではなく、あなたが国のために何を成すことができるのかを問うて欲しい。)」ではないかと思う。
- 私立高校は県内に17校あり、在籍生徒は約9,000人いる。10年間で約3,150人の生徒が減少し、その先は半数になると言われているが、20年後はすぐにやってくる。そうなれば、私立高校は全て消滅してしまうのではないかと危惧している。本県の公私の割合はおおよそ75対25である。東京都、京都府、福岡県は60対40、埼玉は65対35などであるが、全国の公私比率はだいたい70対30である。県教育委員会とは年2回話し合いをしており、公私割合についても70対30にならないか要望している。自分の学校には140人ほどの教職員がいるが、生徒数が減ったからと言って、教員をすぐに減らすこともできない。答申(案)の概要の「第4 各地区の学校配置等に関する基本的な方向性」において、学級数の増減見込みがある。この学級数の増減は、今後、具体的に計画策定を進めていく時に、75対25で検討するのか、70対30で検討するのか分からないが、少しでも公私比率のことを念頭に置いていただけることを期待している。
- 私は、学校・学科の在り方の部分に携わらせていただいたが、多様な教育の資源をもっている青森県の状況が分かり、改めて教育に力を入れている県であると感じながら検討を進めてきた。今後、地域を支える人財、社会を牽引する人財、産業の発展に貢献する人財を育成していくとあるが、今後10年は「今を支える人財」の育成になると思う。そして、並行して「未来を支える人財」の育成に向け、こういった取組が必要なのかを是非検討してほしい。
- 良い勉強をさせていただいた。話題は高等学校のことであるが、今の幼児、小学生などに関係することであり、青森県の教育の根幹について話し合った会議であったと感じている。どのように青森県のために進めていくのか、そのための高等学校の在り方はどうあれば良いのかということをいろいろな角度から検討した。その結果が答申である。この答申がこれからもぶれることなく、10年後、20年後も様々補強しながら、青森県の教育を考えていく手立てになれば良いと思う。高校の教員や保護者等と話し合うと、「検討会議は、結局統廃合についての会議」と言われるが、そうではなく、これからの子どもたちにこういった教育を受けさせるのかを話し合っている会議である。これまで相当

な回数を重ねて話し合ってきた。多角的な検討の結果である答申が、将来の青森県を担う子どもたちの行く末につながるのだと説明している。我々、市町村教育委員会もまた、将来像を見据えながら、小・中学校の在り方について検討している。この答申は、幼児、小学生、中学生、高校生、大学生と将来の青森県を担う人財の育成に向けた教育の在り方について、今一度、県民の皆様を考えてもらいたいという提言だと感じている。そして、この提言を大切にしてほしいと感じている。

広い視野を持つことが大切であり、これから定時制課程や公私間の関係など様々課題はあると思うが、青森県の子どもたちをどう育てていくのかという答申であるから、ぶれることなく取り組んでもらいたい。

○ 今回の学校視察等で感じたことは、どこの学校の先生方も一生懸命その学校のために頑張っているということである。そして先生の熱意を感じた。地域の方も学校を残したいという熱い思いが伝わってきた。その中で、自分の卒業した小学校の閉校式典に行ったが、同級生とともに母校に対する熱い感情がこみ上げた。この答申がどのような形で計画になるかは分からないが、我々は大変な重責を担っていると改めて感じている。

○ 保護者の立場でこの検討会議に携わって、委員の方々から様々な貴重な意見を聞くことができたことは非常に貴重な体験であった。PTAの会議でこの検討会議の報告をするたびに、子どもたちが夢や志をもって過ごすためにはどうすれば良いのかということは、保護者としても非常に関心の高い事項であると感じる。特に中学生、高校生は人間形成にとって大切な時期である。その際、高校をどのように選択するのか。現状は輪切りの進学になっているかもしれないが、子どもたちに生きる力を育むこと、また将来を見据えて子どもたちに様々な選択肢を提供していくことの大切さを勉強させていただいた。

○ 様々な立場の委員の発言を事務局が的確にまとめてくれたことに感謝する。明日の新聞のことを考えると、生徒数の減少というショッキングなもの、重点校、拠点校の取組などが掲載されるのではないかと思う。この検討会議は非常に内容のあるものであり、答申は良くまとまったと感じている。「攻めの農林水産業」として知事がずっと頑張ってきた。ようやく「青天の霹靂」が特A米になり実を結んでいる。深刻な問題はあがるが、悲観することなく農業のように「攻めの教育」で突き進んでほしい。今回の答申では、学校配置においてかなりの配慮という意志が盛り込まれている。自分自身、この検討会議に携わった者としての責任をもって、これからの仕事に取り組んでいきたい。

○ 30数年前、三本木高校に赴任した時、生徒数は1,200人であり、分校、定時制課程の生徒を合わせると約1,500人いた。5年前に再度三本木高校に赴任した際の生徒数は800人を下回っていた。今後10年間で約3,100

0人減少するとあるが、生徒数が減少することは、現場の教員も地域も身にしみを感じている。何十年も前から人口問題が課題である。現状の中で、より良い社会のシステムをどのように作っていくのかということが、学校にも言えることである。自分は、退職し現場を離れてから流行の部分には遅れているかもしれないが、生徒そのものを目的として考えるという不易の部分で力になれないかと考えてきた。新しい学校のシステムを知ったり、様々な意見を聞くことができ、大変勉強になった。今後も様々な教育の問題が出てくると思うが、いつも生徒たちを中心に考えていけば、何とかなると改めて感じている。

- 振り返ると、重点校、拠点校の話題になった時、委員同士で様々議論したわけだが、その辺りから次第に方向性がまとまってきたように感じている。自分は高校教員として38年間勤め、退職したが、現場の教員の思いを代弁したり、自分が現場にいた時に感じていた思いを伝えたりするように努めながら会議に参加した。自分の孫たちが高校生になった時の教育環境を検討したと思っている。子どもたちが将来の青森県の教育を受けるということを考えるだけではなく、これから教員となる若者や現場の若手の教員が、自分の能力を十分発揮できるような高校教育の環境であってほしい。
- これから答申を教育長に提出することになるが、この会議で決まったことは構想であって、これからは大切な本番だと思う。県教育委員会のこれからの頑張りに大いに期待している。また、マスコミという立場からタイミングをとらえ、県教育委員会の取組を確認するとともに、一緒になって応援していきたいと考えている。
- 個人的には、教育には様々な形態があると思う。施設としての学校に、生徒を集めて施す教育、つまり「学校教育とは何か。」ということを考えさせられた。10年後には大幅に生徒数が減少する。その時に今回と同様の会議が設置されるのか。その時に学校を統廃合することもあるのか、ないのか。さらに子どもの数が減少する中で、学校教育の在り方そのものを考えていかなければならない時代になってきたと感じた。これから県教育委員会ではより具体的な計画を策定すると思うが、事務局にはしっかり取り組んでもらいたい。自分たちも他人事ではなく、その計画が「自分たちが関わったもの」であるという目で見ていければ良いと思う。
- 検討会議の委員になった時、ある方から「委員として発言するのは良いが、その後もきちんと責任を果たす必要がある。」と言われた。10年後にこのメンバーで答申の内容を検証できればと思っている。今回の答申は前回までと比較し、ハード面よりもソフト面を重視している。生徒数の減少だけの問題ではなく、全体的に人口が減少する中でどう対応するか。これからは、できるだけ「柔軟な形」でグローバル化や多様化に対応できる学校の仕組みが大切であり、

この「柔軟」ということをどうとらえるかがポイントではないかと感じている。答申にある「連携」は、この「柔軟」な対応の一つである。ある時、議事録を御覧になった方から、「委員は経験値だけで発言しているのではないか。」と厳しい言葉をいただいた。委員がしっかり勉強した上で会議に臨んだのかということだったと思う。委員それぞれの立場で考え、勉強し、発言した結果がこの答申だったと思う。本日答申した後も、10年後きちんと検証できるようにこれからも見守っていきたいと感じている。

- この答申は様々な議論があってできたものであり、柔軟な内容になっていると思う。ただし、この答申を実際に計画にしていく段階で、具体的に学校が縮小する、あるいは統廃合になるとなった場合に、その学校の関係者からこの会議を見れば、「結局は縮小するための議論」と言われると思う。そのことは重々覚悟している。それはあくまでも結果論であり、その結果に至るまでに取り組むべきことが、この答申には入っていると感じている。そうは言っても責められることもあろうかと思う。全員が納得するものを作ることができれば良いが、そうはならない。様々なことを言われたとしても、委員の方々が非常に真摯に様々な議論していただいた結果である。自分は良いものができたと感じている。これからの県教育委員会の政策次第では、この答申は100点にも120点にもなる。この答申を受けて高校教育改革を実施していく段階で修正が必要なのであれば修正していけば良い。10年後このメンバーで検証し、あるいは途中であっても修正していくことがあって良いと思う。

生徒数減少に合わせて教員定数が減らされていくことが、高等学校においても予想される。義務教育には予算化された取組があると聞くが、法律で決まっているから生徒数に応じて教員を減少するという杓子定規な対応では100年後の日本は危ういと感じる。国に対して、そのようなことがないよう、教育の根幹は人であることを、県教育委員会は常に訴えて続けてほしい。

答申をとりまとめるに当たり、議長から「平成26年6月に県教育長から『社会の変化や生徒の急激な減少に対応し、夢や志の実現に向けた知・徳・体を育むための県立高等学校の在り方について』諮問を受け、委員とともに延べ43回の会議を開催して慎重に検討を重ね、本日、その結果を『青森県立高等学校将来構想について』の答申としてとりまとめることができた。各委員の熱心な審議により、これからの本県高校教育のあるべき姿を提言することができたものと考えている。御協力いただいた皆様に心より感謝申し上げたい。県教育委員会においては、この答申を踏まえ、未来を担う子どもたち一人一人の夢や志の実現に向けて、平成30年度以降の県立高校に関する計画を策定し、各高校が特色ある教育活動を一層推進されるよう期待する。」との発言があった。

3 答申

議長から検討会議の答申が教育長に手交された。

教育長から謝辞があった。

4 閉会